

# 佐藤春夫「指紋」論

## 探偵小説の系譜

福 壽 鈴 美

はじめに

佐藤春夫は一九一七(大正六)年、自身が命名した同人誌『星座』に短編小説『西班牙犬の家』を発表後、自宅で心臓発作を起こし亡くなる一九六四(昭和三九)年まで積極的に執筆活動をし、数多くの作品を世に送り出した。その創作活動は多岐に渡り、詩歌、戯曲、童話、評伝、評論、翻訳、散文、絵画に至るまで幅広い分野で活躍をしている。同時に海外の文化や文学に造詣も深く、それらは彼の創作活動に多方面から影響を与えているといえる。

特に〈Detective Story〉、つまり〈探偵小説〉に深い関心を示しており、エドガー・アラン・ポーを中心に多くの作家の影響を受け、自身も〈探偵小説〉たる作品を積極的に創作している。当時はまだ〈娯楽小説〉としての印象が強く、翻訳・翻案は多く発表されていたものの、純文学が主流であった日本の文壇では〈探偵小説〉の書き手は不足していた。その様な時代の中で積極的に〈探偵小説〉に取り組んだ佐藤春夫を、江戸川乱歩は後年「探偵小説を他の作家のように軽蔑せず、それを意図して書<sup>1)</sup>」いた作家として讃えている。佐藤春夫は後世の〈探偵小説家〉たちに多くの影響を与えた作家であったと言える。

その中でも「指紋」は佐藤春夫が文壇に登場して一年半足らずの間に発表された作品であり、ポーを中心に様々な海外の〈探偵小説〉の影響を受け書かれた〈探偵小説〉である。本論では題名にもなっている「指紋」と〈探偵小説〉の関係性を紐解くと共に、そこから見えてくる海外の〈探偵小説〉の影響やオマージュについて分析し、その効果について考察する。また、本作の制作背景や仕掛けを分析することによって本作を〈探偵小説〉足らしめる要素について言及を行う。

### 一 〈探偵小説〉における「指紋」

「指紋」は一九二八(大正七)年七月一五日発行の雑誌『中央公論』臨時増刊号「秘密と解放号」に掲載された短編小説である。雑誌掲載時には副題を「——私の不幸な友人の一生に就ての怪奇な探偵的物語——」としていたが、後に短編集『病める薔薇』(一九一四年)に収録の際、「私の不幸な友人の一生に就ての怪奇な物語」へと改めている。

物語は一人称の語りが採用されており、語り手である「私」は「作家」を職業としている「佐藤」という男性である。そして物語内の

出来事は全て過去のものであり、「回想」という形式で描き出されている。この語り手である「私」は如何にも作者である佐藤春夫の様に描かれており、物語も実在の友人に関する実際の記録であるかのように描かれているメタフィクションの手法が採用されている。この様に「私」を語り手として、さも実際の出来事の様に物語を展開する手法は佐藤春夫がたびたび用いているものであり、彼の代表的な手法の一つであるといえる。この手法によって読者は物語の中で起こる出来事が実在の人物によって、実際に引き起こされたことであるかのように錯覚することが出来る仕掛けとなっている。

物語は語り手である「私」の家に旧友である「R・N」が「かくまってくれ給え」とやってくることに発端する。「R・N」は洋行中に重度のアヘン中毒となり、その中毒を克服するつもりで「私」の家へと身を寄せるのである。そのようにして「私」とその妻、そして「半狂人」である「R・N」との共同生活が始まる。ある日、「私」と「R・N」が浅草で伴って見た活動写真『女賊ロザリオ』の中で、俳優の「指紋」が画面に大写しになったことから、「R・N」はその後「指紋」に対して「狂気の熱中をもって」没頭していく。後に「私」は「R・N」から自分の持つ持っている懐中時計についている「指紋」と画面に大写しになった「指紋」が同じものであり、その「指紋」の持ち主で俳優の「ウキリアム・ウキルスン」こそが、以前に「R・N」が長崎で滞在していた阿片窟で起こった殺人事件の犯人であると告げられる。この時点で「私」は「R・N」の話に対して半信半疑であった。しかし、その告白から数年後に「私」は偶然手にした新聞で、以前に「R・N」と共に訪れた家屋から白骨死体が発見された事を知り、それによって「R・N」の主張が「狂

人の妄想の一部分と聞いていたことが、それがとにかく或る部分まで事実だった」と確信し、次第に自身も「指紋」に魅入られていくことで話は閉じられる。

物語の中で重要な要素として役割を果たし、物語の題名にもなっている「指紋」であるが、世界的に見ると事件解決などに用いられるようになったのは一九世紀後半から二〇世紀初頭である。それまでもインドなど一部の地域では用いられてきたが、指紋が個人特定に対して有効性があることが世界的に認められるようになった大きなきっかけはスコットランド人医師であるヘンリー・フォールズ(Henry Faulds, 一八四三—一九三〇)が一八八〇年に世界的権威の学術雑誌「ネイチャー(Nature)」に「指紋による科学的個人識別に関する研究論文(原題: On the Skin-Furrows of the Hand)」を発表したことである。一八九二年にはイギリス人人類学者であるフランシス・ゴルトン(Sir Francis Galton, 一八二二—一九一一)が著書『フィンガープリント(原題: Fingerprint)』の中で指紋を法科学で応用することを提唱した。こういった一連の流れの中でインドやイギリスを皮切りに、世界的に指紋を事件の捜査に採用する動きが広まり、一九〇八(明治四一)年には日本でも「指紋法」が採択され、一九一一(明治四四)年から警視庁で犯罪捜査に用いられるようになった。つまり、本作は日本において警察が指紋を犯人特定的手段として用いるようになって一〇年程度で発表された作品であるのだ。しかし、日本では古来より〈拇印〉の文化が存在しており、前述のヘンリー・フォールズが指紋に関する研究を始めるきっかけとなったのも彼が日本滞在中に〈拇印〉文化について知り、興味を抱いたことに発している。つまり日本においては「指紋」の「万

人不同性」こそ証明されてはいなかったが、それでもある一定の基準で個人特定能力を持つものとして世界的発見がなされるよりも以前から一般的に理解されていたのである。

また小説の世界において、いわゆる〈探偵小説〉の中で初めて事件解決の為に指紋が全面的に用いられたのは『世界文学大事典』によるとマーク・トウェイン (Mark Twain, 一八五〇—一九一〇) の『まぬけのウィルソン(原題: "The Tragedy of Puddinghead Wilson")』であるとされている。これはアメリカで発行されていた雑誌「The Century Magazine」に一八九三年から連載されていた中編小説であり、一八九四年には単行本として出版されている。またマーク・トウェインはこれ以前にも一八八三年に発表した『ミシシッピの生活(原題: "Life on the Mississippi")』の中の一章「親指の指紋とその後日物語(原題: "A thumb-Print and What Came of It")」の中で「ある人間について、揺りかごから墓場まで絶対に変わらないものが一つある——拇指球の指紋だ。二人の人間の拇指にまったく同一の指紋が見られることは決してない」と記しており、妻子を殺されたカール・リッターはこの言葉を根拠に指紋を集めることで犯人を見つけ出す手助けとしていいることから、こちらを初めての指紋による事件解決を行った〈探偵小説〉と捉えることも出来る。

どちらにせよマーク・トウェインは初めて指紋を小説に用いたことで、世間一般の認知に対する一端を担ったことは間違いない。前述の『まぬけのウィルソン』は人の指紋を収集することを趣味とする田舎弁護士「デーヴィッド・ウィルソン」が殺人事件に遭遇し、それまでに収集していた指紋を用いることで、当初の容疑者を覆して犯人を特定するという筋書きで描かれている。ここで注目してお

きたい事は、その登場人物の名前が「指紋」の登場人物「ウキリアム・ウキルスン」と同じ苗字である。「ウィルソン」自体はそれほど珍しい名字ではなく、また『まぬけのウィルソン』での「デーヴィッド・ウィルソン」は探偵役を担っており、「指紋」の中で容疑者とされる「ウキリアム・ウキルスン」とは異なった立場を示している。しかし、「指紋」を扱う〈探偵小説〉で同じ苗字を冠する人物が登場しているということは理解しておきたい。

## 二 〈海外探偵小説〉の影響

本作における大きな特徴の一つとして、海外の〈探偵小説〉に対する〈オマージュ〉が挙げられる。前述したように「指紋」はメタフィクションの手法によって作者である佐藤春夫自身が体験したことに基づいて描かれたような態で物語が展開しており、その中に登場する活動写真『女賊ロザリオ』についても「見た人もあるかもしれない」と読者に語りかけている。しかし実際は架空の作品であり、そこに登場した「ウキリアム・ウキルスン」なる俳優もまた架空の人物なのである。そして、この登場人物の名前がアメリカ人作家エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 一八〇九—一八四九) の短編小説「ウキリアム・ウィルソン」(原題: William Wilson) の登場人物から名付けられている事は明白である。エドガー・アラン・ポーの熱心な読者であった佐藤春夫が、その作品から名前を引用したことが理解できる。

ウキリアム・ウキルスン氏、その人はグリーンフラグ会社の専属俳優にして『XYZ』を初舞台として、『女賊ロザリオ』『汽車

泥棒』其外の映画に現れて、端役ではあつたとは言え、江湖の活動写真愛好家に依りてその深刻なる芸風を認められ、それに依つて多大の将来を囑目されていたウキリアム・ウキルスン氏は、十月二十七日突然行方不明になつた。その原因は全く知るべくもないけれども、彼は元来英国風の姓名を名乗るにも不係、独逸人らしき風貌を具備して居る点より判断して、時節柄多分独探なりし者が、その發覺の心配のためにこの怪しむべき拳動に出でたるものなるべしと評判されて居る。何は兎もあれ、我々は活動写真愛好者の立場よりして、この有望なる少壮俳優を、突然我々の眼界から見失つたことを最も惜しむものである。

引用部分は「R・N」が「私」に見せた「活動写真雑誌」に掲載されていた記事であり、俳優「ウキリアム・ウキルスン」のそれまでの経歴と現在行方不明であることを伝えている。ここで登場する「ウキリアム・ウキルスン」のデビュー作とされる作品『XYZ』と、彼が所属している映画会社「グリーンフラグ会社」はアメリカの女性作家アンナ・キャサリン・グリーン (Anna Katharine Green, 一八四六一—一九三五) と、彼女の代表作の一つである探偵小説『XYZ (原題: "XYZ: A Detective Story")』から名付けられている事が推測できる。アンナ・キャサリン・グリーンは一八七八年に「リーヴェンワース事件 (原題: "The Leavenworth Case")」を發表し、その名を世界に知られるようになった。日本においても「リーヴェンワース事件」は明治二三年に黒岩涙香によって「真ッ暗」という題名で翻案されており、一九九二年以降は雑誌『新青年』に複数の作品が抄訳または翻訳されて掲載されている。

ガボリオとボアゴベの翻訳は一八八〇年代になるまでロンド

ンに出なかつたが、ひとたびヴィゼテリー社の赤表紙の廉価版になって現れると、大量に売れたし、またフランス警察の捜査方が、今日クロフツ派の作家と目されている人たちの發展にいちじるしい影響を与えて来たのである。ヴィゼテリー社が大陸から輸入した他の翻訳物の例で思いがけず知れるように、イギリスは合衆国の後を追っていたのだ。つまりガボリオの翻訳は彼の同国人がそれをロンドンで消化する何年も前に、すでにポストンやニューヨークに出でいたのである。これらは大衆の興味を刺激し、本国産の探偵小説という形でにわかに反応を呼び起こした。またそれらが有名なピンカートン双書に与えた影響は、一八五五年以来イギリスの本屋にゆきわたっていた無数の架空回想録が及ぼしたものに比し、おそらくは大きくはなかつたであろうけれども、アンナ・キャサリン・グリーンの作品には、その影響がはつきりと現れている<sup>(註)</sup>。

引用からも分かる通り、アンナ・キャサリン・グリーンはフランスの作家エミール・ガボリオ (Etienne Emile Gaboriau, 一八三二—一八七三) の多大な影響を受けた作家として知られる。エミール・ガボリオは一八六六年に長編小説『ルージュ事件 (原題: L'affaire Lerouge)』を發表。彼もまた、明治二年には黒岩涙香によって翻案され、日本に紹介されている。そしてエミール・ガボリオ自身はエドガー・アラン・ポーの影響を受け、その手法を取り入れたことで長編探偵小説の先駆者となった人物である。佐藤春夫自身がガボリオの読者であったことは「探偵小説小論」に記されており評価していたことは明らかであり、本作で「R・N」が「指紋の研究のオオソリテイになる書物」を買い漁って、事件を解決しようとする

姿は、犯罪に関する文献を買い漁ることによって得た知識で事件を解決する『ルージュ事件』の探偵タバレを連想させる。

これらの要素は物語本編に大きな影響をもたらすものではない。また、「指紋」発表時には、これらの作品の多くは翻訳されておらず、「指紋」の読者がこれらの〈オマージュ〉について全てを理解できていたとは言い難い。しかし、佐藤春夫やその周辺の作家たちのように一部の語学に長けた、〈探偵小説〉の熱心な読者はその言葉遊びを楽しむことが出来たと推測できる。

特に大きな効果を果たしたのはポーの短編小説「ウィリアム・ウィルソン」である。当時、ポーの作品は既に様々な翻訳が出版され、日本でも人気を博していた。「指紋」が発表される二カ月前には谷崎潤一郎が明らかに「ウィリアム・ウィルソン」の影響下にある短編小説「金と銀」が発表されていることを考えると、ポーや〈探偵小説〉の熱心な読者の中では知られた作品であることが窺える。「R・N」が執着する相手として「ウヰリアム・ウヰルソン」という名前の人物が設定されることよって、読者はこの人物に対して明らかにポーの「ウィリアム・ウィルソン」のイメージを重ねてしまう。このように「ウィリアム・ウィルソン」をインターテキストに用いることは物語の虚構性を強調すると共に、登場人物に対して読者が抱くイメージを一定の方向に導く役割を果たしているのである。

### 三 探偵小説としての「指紋」

佐藤春夫は本作を創作するに至った過程を後に手記「「指紋」の頃」に記している。

その頃僕は殆どなにも書いてゐなかつたが、谷崎潤一郎が僕に何か書かせようと頻に鞭撻してゐてくれた。僕は何も書けさうにもなく、と云つて他に職業を求められさうもなく、洗ふが如き赤貧で大いに参つたすゑ、

「愈々何も書けないとすると、僕には他に出来る仕事もないのだが。」

といふと、谷崎は暫くして、

「君に出来る仕事先づ二つあるね。一つは文学雑誌の編輯主任、もう一つは、先づ探偵だ。」

(中略)

谷崎はその頃ポオを読み耽つて、「モルグ街の殺人」にひどく関心してゐた。

それで、慢性神経衰弱でヒステリーの神経過敏になつてゐる僕を見て、探偵にしたらいい、かと思つたのかも知れぬ。

(中略)

それで、谷崎の続きだが、確かその年の二月か三月頃、彼が「中央公論」の瀧田に会ふと、瀧田が、

「雑誌の増刊号に一度みんなに探偵小説を書いて貰ひ度いといふ思ひつきがある。まだ確定したわけではないが、若しその時には谷崎さん、あなたには真先に頼むつもりだが勿論意義なくやつてくれるでせうな。」

といふので、谷崎は承知した序でに、

「無名の人でいゝなら一人探偵小説を書かしてみたいのがゐるのだがな」と云ふと、瀧田は、

「は、ア、佐藤春夫ですか」と、谷崎が何にも言はぬ先から先

方でさう訊いたといふ事である。瀧田は、別に僕にそんな才能があると思つた訳けではなく、僕と谷崎とが仲好くしてゐるので、直観的に気がついたのであるかも知れぬ。

瀧田の思ひつきは、その年の七月に愈々実現される事になつた。その年の五月に、作品を一つ出して貰つた上に、七月の臨時増刊号の探偵小説を書かして貰へるといふ幸運を僕は担ふ事になつた。それで、その号の予告には、僕は「セロを弾く男」といふ題を発表して置いた。実は、題だけ出来てゐて中身は未だなかつた。

このような経緯から、〈探偵小説〉を書くこととなつた佐藤春夫であるが、自身は本作が〈探偵小説〉であるかどうかという議論については非常に懐疑的であり、前述したように実際に雑誌掲載時は「——私の不幸な友人の一生に就ての怪奇な探偵的物語——」としていた副題を短編集『病める薔薇』に収録するにあつて「私の不幸な友人の一生に就ての怪奇な物語」へと変更している。しかし、そのような本人の考えとは裏腹に他の作家からは〈探偵小説〉としての評価は高く、日本における代表的な〈探偵小説〉家である江戸川乱歩は自らも編集員の一人であつた『日本推理小説大系1 明治大正集』の解説で佐藤春夫とその作品について、他の収録作家と比較しながら、以下の様に評価している。

谷崎、芥川、佐藤とならべると、佐藤春夫が最も純探偵小説に近い作品を書いている。探偵小説風の作品としては、前記「中央公論」増刊にのつた「指紋」が最初であるが、これなど純探偵小説といつていいものだし、本巻にのせた三篇〔女誠扇綺譚〕「オカアサン」「女人焚死」——論者註）なども、ほとんど純探偵

小説なのである。

また、〈探偵小説〉を書く様に佐藤春夫に勧めた谷崎潤一郎自身も本作を非常に気に入つており、「今迄に書いた何物よりも佳い」というように評価しており、「指紋」が発表された当時に同作品が好意的に評価されていたことが理解できる。そして何より、佐藤春夫自身が作品内に前述のような〈オマージュ〉の要素を積極的に取り入れていることから、彼の〈探偵小説〉への非常に強い意識を感じざるを得ない。また、佐藤春夫自身は自己を謙遜的もしくは否定的に表現する傾向があるので、それも踏まえて考えると「指紋」を〈探偵小説〉と位置付けることは妥当であると言える。

このように「指紋」を〈探偵小説〉として捉える場合、事件の〈謎〉を解決する〈探偵〉の役割を担っているのは「R・N」である。しかし、読者にとつては「R・N」もまた〈謎〉であり、その不可解な行動を解決するための〈探偵〉役は語り手の「私」が担つているのである。「打解けた親友」であつたはずの「R・N」は「オピウム・イイター」つまり阿片常習者となり、「私」の前に「謎になつて現れ」た。しかし、「私」は決してその〈謎〉を積極的に解こうと行動を起こすわけではない。「R・N」が自分が関わつてしまつた殺人事件を解決すべく、「狂気」の中で奔走する姿は〈積極的な探偵〉と表現することができる。それに対して、何を調べているかを明かさず、ひたすら〈謎〉の奔走を繰り返す「R・N」の行動を積極的に説明しようとはせず、「R・N」から与えられた情報のみを用いてその〈謎〉を究明していく「私」の姿は〈消極的な探偵〉であるといふことができる。結果として、「R・N」の死後に「長崎の幽霊屋敷」において白骨死体が発見された事を報じる新聞の記事

事によつて初めて「R・N」の推測が正しかったと断じるのである。さらにこれも、自らが積極的に解明してはいない事によつて、「私」はミスリードされたまま物語が閉じていくのである。

「R・N」は長野の「阿片窟」で起こった殺人事件の犯人は浅草で見た活動写真に登場していた俳優「ウキリアム・ウキルスン」であるということをも、「指紋」を根拠に「私」に主張する。そしてその仮説を裏付ける要素としても日付が用いられているのである。

ウキリアム・ウキルスン氏、その人はグリーンフラグ会社の専属俳優にして『XYZ』を初舞台として、『女賊ロザリオ』『汽車泥棒』其他の映画に現れて、端役ではあったとは言え、江湖の活動写真愛好家に依りてその深刻なる芸風を認められ、それに依つて多大の将来を囑目されて居たウキリアム・ウキルスン氏は、十月二十七日突然行方不明になった。(傍線論者)

「R・N」が「私」に見せた活動写真雑誌にはこのような記事が掲載されており、これを読んだことから「R・N」の独白とも謎解きとも取れる行為が行われる。「ウキリアム・ウキルスン」に対して告発文を送った「R・N」は、それと「ウキリアム・ウキルスン」の失踪の關係性を「私」に告げるのである。

「こまで来て、私は先刻の私の手にとどいたキネママガジンの消息欄を見せる筈だった。私はうれししさのあまりそれを君に早く見せすぎた。一体あの二通の手紙は長崎の停留所で投函したのだ。あ、君はそれを見て居たね。我々が長崎へ行つたのはあれは十月四日である。それは重要なことだ。普通ならばローサアンゼルスまで郵便は二十日位でとどく筈だ。けれども戦争以来郵便は甚だ不規則だ——活動写真の雑誌が時々非常に延着

して私を待ち遠しがらせる程だ。で私はその私の手紙をウキリアム・ウキルスンが何時見たかは大抵解る。

さう言ひながら、何時の間にか私の机の前に来て腰を下ろして居たR・Nは、机の最も大きな抽斗から、何か写真でも這入っているらしい郵便物を取り出した。さうしてそれを私に渡してきた。

「さあ、それはグリーンフラグ会社からの郵便物だ。やつと十日ほど前に君の細君から受け取つた。若しあるならば、映画の目録といふやうなものを送つてくれるやうにと、私は君の名でその会社へ申し込んだのだ。私はそんなものを欲しいよりも、その会社から来るものの日附けが見たかつたから。それは十一月十六日に出して居る。すると私が出した手紙は少くもそれより以前にその会社へ着いたのだ。それと同時に投函したウキリアム・ウキルスンへのものもきつと十一月十六日頃着いたと思つて差支へない。彼の手には直ぐ入つたかどうかかわからないが十一月二十四日——彼が行方不明になつた日までには、私の手紙はきちと彼の目に這入つたものと見做してよからう。彼は私の手紙を見てから行方不明になつたのだ。(傍線波線論者)

傍線部に有る通りに「R・N」の手紙が届いたのだとすれば、活動写真雑誌に掲載されている「ウキリアム・ウキルスン」の消息が不明になつた「十月二十七日」までには手紙が届いていない。「R・N」の発言通り長崎へ行つたのが「十月四日」であり、「二十日位」で手紙が届いているとすれば、その発言は矛盾しないが、その可能性は「R・N」の発言から察するに低く、さらに「R・N」は「ウキリアム・ウキルスン」が行方不明になつた日付を「十一月二十四

日」だと考えているのである。つまり活動写真俳優である「ウキリアム・ウキルスン」の失踪が「R・N」の送った告発の手紙によるものだと断定できなくなる。

本作の中で〈探偵〉的役割を担っているといえる「R・N」は、「指紋」以外の根拠として、自身が告発文を送った日付と「ウキリアム・ウキルスン」が失踪した日付を提示するが、そこには明らかな誤解が生じている。しかし、〈消極的な探偵〉である「私」は最終的に「R・N」が提示している根拠の明らかな誤りにも気付くことができずに、その主張を受け入れるのである。

一般的な〈探偵小説〉であれば、探偵の周辺には物語の中の〈事件〉や〈謎〉を共有し、その解明の課程や詳細の解説を聞く役割を担う登場人物が存在する。「R・N」にとってその〈聞き手〉は「私」である。しかし、「私」にとつての〈聞き手〉は物語内には存在しない。〈消極的な探偵〉である「私」は読者にそれを手記と言う形で公開することによって初めて、その役割を読者に託しているのである。本作において「私」は自ら事件解決を行う訳ではない。しかし、その事件解決の課程を見守り、結果として自分以外の誰かと共有するという行為は〈探偵小説〉における〈探偵〉の役割を果たしているといえるのだろう。

## おわりに

佐藤春夫は生涯をかけて積極的に文学的挑戦を行っていた作家であると言える。その中でも「指紋」は作家として初期に書かれた作品であり、それまで書き手があまりおらず、国内では確立されてい

なかった〈探偵小説〉というジャンルに果敢に挑戦し、成功した例であると言える。メタフィクションという手法を用いて、さも実際の出来事のように語りながらも、様々な〈海外探偵小説〉をインターテキストとして取り入れ、オマージュすることによってそのフィクション性を強調する仕組みを形成している。それは同時に国内にいる〈海外探偵小説〉の読者をひきつける要素としての役割を果たしたことが想像できる。こういった手法は彼が書き手であると同時に、〈探偵小説〉に対する熱心な読者であったことに起因するであろう。特にポーに対する関心は深く、後の作品にも何度もインターテキストとして取り入れられていることからその影響の大きさが図り知れる。

このような佐藤春夫の一連の挑戦は後に発生する〈探偵小説〉の隆盛と、江戸川乱歩を始めとする〈探偵小説家〉に少なからず影響を与える結果となった。しかし、その一方で「どうも探偵小説のための探偵小説愛好家ではない」と自らを形容し、物語の背景に「芸術家の思想的情熱なり、詩趣なり、人間的観察なり、その他凡ての芸術に必要な何ものかをその根底に持つてゐないものは、筋を知つて了ふと面白くないものである」と語る。つまり、〈探偵小説〉がただのトリックとその種明かしの物語であれば、一度物語内容を知つてしまえば次からは楽しむことができず、何度も読みたいと思える作品にはならない。そこを乗り越え、唯の〈探偵小説〉ではなく、そこには「芸術美」が必要であるとする。彼にとつては常にポーの様な詩的、芸術的感覚を持ち合わせた小説こそが、「芸術美」を持った作品であり、目指していた形であったのだろう。その為にも彼は晩年に至るまで様々な文学的挑戦を行っている。本作はその皮切り



となった重要な作品であったことが理解できる。

※本論テキストは『定本佐藤春夫全集』（臨川書店、一九九九年三月～二〇〇一年二月）に依る。

註釈

- (i) 江戸川乱歩「解説」内「佐藤春夫の三篇」（『日本推理小説大系1 明治大正集』、東都書房、一九六〇年十二月）  
『指紋は知っていた』（チャンダック・セングープタ著・平石律子訳、文春文庫、二〇〇四年）、『指紋を発見した男』（ヘンリー・フォールズと犯罪科学の夜明け）（コリン・ビーヴァン著・茂木健訳、主婦の友社、二〇〇五年）、『指紋による科学的個人識別に関する研究論文（原題：On the Skin-Furrows of the Hand）』（『Nature』 No.22 (28 October 1880)）
- (iii) 「フィンガープリント（原題：Fingerprint）」
- (iv) 『司法沿革誌』、渡辺公三「個人識別法の新紀元」―日本における指紋法導入の文脈」（『立命館国際研究』十二巻二号、立命館大学）
- (v) 「指紋による科学的個人識別に関する研究論文（原題：On the Skin-Furrows of the Hand）」
- (vi) 『世界文学大事典』（集英社、一九九七年四月）
- (vii) ジョン・カーター「探偵小説収集」（武田行雄訳）『推理小説の美学』（鈴木幸夫訳編、研究社、一九七四年六月）
- (viii) 谷崎潤一郎「金と銀」、『黒潮』大三巻第五号（一九二九年五月、太陽通信社）に掲載。
- (ix) 佐藤春夫「指紋」の頃、『新青年』第十巻第四号（一九二九年

三月）

(x)

江戸川乱歩「解説」内「佐藤春夫の三篇」（『日本推理小説大系1 明治大正集』、東都書房、一九六〇年十二月）

(xi)

佐藤春夫「アントニオのやうなセンチメンタリズムから生れた」田園の憂鬱』、『新潮』第三〇巻第一号（一九一九年一月）内「出世作を出すまで」

(xii)

佐藤春夫「指紋」の頃、『新青年』第十巻第四号（一九二九年三月）に掲載。

(xiii)

註釈一に同じ。

(xiv)

雑誌『文芸時報』（一九二五年十二月）に掲載した「探偵小説と芸術味」で、佐藤春夫は与えられたタイトルに対して「題のうちの一つだ。が、与えられた題だからそのまま使う。ただし苦情だけは言わずにいられない。言うべくんば芸術美としたい」と前書きをした上で、『探偵小説』における「芸術美」とその必要性について記している。